

オーラルヒストリーアーカイブズ - オーラルヒストリー の収集および分析戦略について

瀧川 裕貴 葉山高等研究センター

本節では、このプロジェクトがオーラルヒストリーを収集および分析する際に用いた方法および戦略について報告する。

本プロジェクトでは、日本の共同利用機関の歴史についてあらかじめ記録された公式資料や文書資料を整備するだけでなく、科学者をはじめとして研究所に関わった人々の具体的な活動や出来事の記録を残すため、オーラルヒストリーの手法を採用した¹。オーラルヒストリーによって、文書には残りがたい様々な側面——インフォーマルな活動や意思決定へ至る詳細な過程、日常的な研究活動、また個々の人々のライフストーリー等々——を明らかにすることができる。さらに、文書資料のもつ一定の選択性、それに由来する一面性を正し、多様な歴史を描くことも可能になる。

理論枠組み

オーラルヒストリーでは「誰に」、「どのようなことを」聞くかが非常に重要である。特に本プロジェクトのような大規模なグループプロジェクトの場合、いかなる問題関心に基づいてどのような枠組みを用いてインタビューを行うかについて、共有された理解が不可欠である。そうでなければ、各インタビュアーが個々ばらばらの口述資料を収集するとどまり、重大な実証的・理論的論点を欠落させる危険性が生じる。また、共通の枠組み

¹ オーラルヒストリー一般については(Thompson 1978=2002)を参照。より社会学的な視点からのオーラルヒストリー、「ライフストーリー」としては(Bertaux 1997, Bertaux and Thompson (ed.) 1997, Denzin and Lincoln (ed.) 2000, 桜井 2002, 桜井・小林 2005, 瀧川 2008)を参照。

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

に基づいて収集された一定の構造をもった資料でなければ異なる資料の間を比較分析することも困難である。

そこでわれわれは以下のような枠組みを採用し、オーラルヒストリープロジェクト全体の共通理解を確保しようと努めた。われわれのオーラルヒストリーの目的を一言でいえば、「ライフヒストリーを中心に据えて共同利用機関の歴史を記述すること」にある。この目的がグループにおける共通の問題関心を最大公約したものだといえる。もう少し詳しく言うと、共同利用機関に関わりをもった人々のライフヒストリーを辿ることで、彼らの主観的な観点からみた共同利用機関のあり方を明らかにし、多様な視座からその歴史を明らかにする、ということになる。

インタビューおよび分析の戦略上、次のような二段階のプロセスによって理論枠組みを組織化することが有用である。第一に、科学者その他研究機関の実践に携わる人々が、いかなる歴史的状況において、またいかなる社会構造的、文化的条件によって、科学活動（あるいはその他研究機関の実践）に従事するに至ったか、つまり「なること becoming」のライフヒストリーを分析することである。第二に、そうした生の軌道を経て、人々が科学実践に対してどのような信念や考え、態度をもち、そしてそれらに基づいてどのように行動したかを明らかにすることである。このようにライフヒストリーと結び付けて当事者たちの歴史証言を記録することによって、様々な歴史的エピソードを記述するとどまらず、なぜそのようにいったったのかを、関わった人々の行動を「内側」から理解することにより説明することができるはずである。

インタビューガイド

インタビューはパイロット調査およびオーラルヒストリーや社会学の先行研究を参照しつつ作られたインタビューガイドにそって行われた。インタビューガイドは、科学実践に携わる人々のライフヒストリーにおける重要な出来事を遺漏なく記録することができるように、ひとつひとつの質問項目の理論的位置づけを明確にしつつ構築されている。

使用されたインタビューガイドを付録1に掲載している。まず大テーマ

群を設定し、それぞれのテーマが社会的・科学的に見てどのような意味をもっているかを明確にしている。例えば、「社会階層」、「学校における社会化」、「重要な他者」などに関する質問項目を設けて、ライフヒストリーを理解するために必須となる概念を引き出すことが可能なインタビューを設計している。引き続き、よりブレイクダウンされた質問項目例も具体的に提示されている。ただし、いうまでもなく、実際にはインタビューに応じて質問項目を適宜変更した。

分析

理論枠組みの個所で述べたように、本プロジェクトの問いは、科学者たちのライフヒストリーはどのようなものか、その観点から彼らの科学実践をいかにして理解できるか、という二段構えのものであった。データ分析は当然これらの問いに対する解を与えることを目標としている。

具体的な分析の結果については今後何らかの形で成果発表を行うこととして、ここでは分析の結果として得られたより一般的な理論的帰結について考察することにした²。

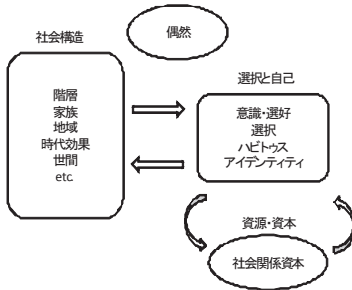


図 1

ライフヒストリーの部分について大まかな区別を行うならば、ライフヒストリーそれ自体の転機をなす出来事、およびそれに先行して「原因」

² 本研究はオーラルヒストリーを厳密かつ分析的な方法で理解するよう試みている。特に社会学において分析的なオーラルヒストリー研究のために参照したのは(Abott 1995, Abell 2004, Bearman et al. 1999, Bearman and Stovel 2000, Griffin 1993, Heise 1991, Smith 2007)などである。

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

となる社会構造上の背景的出来事の二つに区別することができる。ただし、これを単純に結果と原因という単線的な関係として捉えるよりも、両者が相互規定の関係にあると考えたほうがよい。人々の生きる状況はある程度まで当人の選択の結果として構築されるものだからである。さらに、ライフヒストリーを左右する状況の中で、特に社会的な関係や人と人のつながり・コネクションに着目することは社会学的にとくに重要であるため、これを社会関係資本として別個に取り出すことにした。これらを概念図としてまとめたのが図1である。図における「選択と自己」が具体的にはライフヒストリーの転機となる出来事およびその選択を引き起こす自己アイデンティティに相当する。例えば、「大学進学」、「学科選択」、「大学院進学」、「研究内容」、「留学」、「就職」、「配偶者選択」などが選択であり、これにより自己アイデンティティが形成されそれがまた選択に影響を及ぼしていくのである。それに対して分析の結果、ライフヒストリーに対して影響を与える主たる構造や出来事として抽出されたのは「出身階層」や「家族」、「地域」、「生まれた時代」、「世間」などであった。

次に共同利用機関の歴史とライフヒストリーの関係に関する分析について述べる。

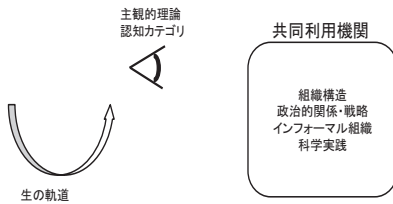


図 2

オーラルヒストリーを収集することの最大の目的は、出来事に具体的に関わった人々の記憶を通して、公式記録に表れない、または公式記録とは異なる歴史記述を手に入れることである。

したがって、それぞれの人々の視点に応じて異なった、複数の歴史記述が成立することになる。共同利用機関の歴史に即して言えば、記録されずに埋もれてしまった多様かつ複数の研究所の歴史を発掘することがわれわれの目的である。

しかし、本プロジェクトで構築した理論枠組みは単に複数の歴史記述を記録することにとどまらず、なぜそれぞれの人々がかかる認識枠組みや歴

史意識をもつにいたったか、その理由の説明までも研究の射程に含めるべく試みている。

そこで当事者たちの共同利用機関に対する主観的理論や認知カテゴリー、そして歴史のプレイヤーとして実際になした行為を、彼らのライフヒストリーと結び付けて理解することが重要である。彼らが研究の場をどのように生き、何を重要と考え、いかなる関係性を構築していったのか、また様々な歴史的出来事をどうやって解釈し行動したのか。これらを理解するためには、彼らがこれまでのライフヒストリーをどのように生き、どのようなアイデンティティを形成し、ハビトゥスを身につけていったかを理解することが必要になるのである（図 2 を参照）。より具体的には研究所の組織構造やそこでの政治的関係や社会的つながり、そして研究や組織運営の戦略などを聞き出し、これをライフヒストリーと関連させつつ理解するように努めた。

オーラルヒストリーを分析するためには単に語られたことをそのまま記述するだけでは不十分だというのはもちろんである。いうまでもなく、当人によって語られた内容がどの程度妥当であるかを独立に検証しなければならない。ただし、それと同時にもし語られた歴史が、焦点の置き方や着目される側面、そして語られる角度に関して、個々人で異なるとしたら（オーラルヒストリーではほとんど必然的にそうなるのであるが）、なぜそのようにして異なる歴史が語られるようになったのか、ということを説明的に理解しなければならない。そしてそのためには分析的な仕方で構築された社会学的方法論が必要となるのである。

成果

本プロジェクトの固有の成果としては、国立遺伝学研究所の歴史に関わるオーラルヒストリーとして、太田朋子氏、森脇和郎氏のオーラルヒストリーインタビュー（瀧川・定松編 2009, 瀧川 2010）を収集した。これらはいずれも、総合研究大学院大学附属図書館（葉山キャンパス）に保管され、教育・研究目的による閲覧が可能である。

また本プロジェクトに関連する成果として、高エネルギー物理学研究所

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

の歴史をはじめとして多数のオーラルヒストリーが収集された。これらの成果は今後逐次公開されていく予定である。

文献

Abbott, A., 1995, "Sequence Analysis: New methods for old ideas." *Annual Review of Sociology* 21, 93-113.

Abell, P., 2004, "Narrative explanation: an alternative to variable-centered explanation." *Annual Review of Sociology* 30, 287-310.

Bearman, P., Faris, R., and J. Moody, 1999, "Blocking the future: new solutions for old problems in historical social science." *Social Science History* 23, 501-533.

Bearman, P. and K. Stovel, 2000, "Becoming a Nazi: a model for narrative networks." *Poetics* 27, 69-90.

Bertaux, Daniel., 1997, *Les Recits de vie : Perspective Ethnosociologique*, NATHAN/HER, Paris. (=2003, 小林多寿子訳『ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房.)

Bertaux, D., and P. Thompson (ed.), 1997, *Pathways to social class : a qualitative approach to social mobility*, Oxford University Press.

Denzin, N. and Y. Lincoln (ed.), 2000, *Handbook of qualitative research*, 2nd edition, Sage Publications, Inc. (=2006, 平山満義監訳, 藤原顕訳『質的研究ハンドブック 2巻』北大路書房.)

Franzosi, R., 2004, *From Words to Numbers: Narrative, Data, and Social Science*. Cambridge University Press, Cambridge, UK

Griffin, L., 1993, "Narrative, event-structure analysis, and causal interpretation in historical sociology." *American Journal of Sociology* 98, 1094–1133.

Heise, D., 1991, "Event structure analysis: a qualitative model for quantitative research." In: Fielding, N., Lee, R. (ed.), *Using Computers in Qualitative Research*. Sage Publications, Newbury Park, CA, pp. 136–163.

桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

桜井厚・小林多寿子編, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.

Thompson, Paul., 1978, *The Voice of the Past: Oral History* 3rd Edition, Oxford University Press. (=2002, 酒井順子訳 『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』 青木書店.

Smith, T., 2007, "Narrative Boundaries and the Dynamics of Ethnic Conflict and Conciliation", *Poetics* 35(1), 22–46.

瀧川裕貴, 2008, 「科学の社会学とオーラルヒストリーの方法」『科学におけるコミュニケーション 2007』総合研究大学院大学, pp. 264-290

瀧川裕貴編, 2010, 『森脇和郎オーラルヒストリー』総合研究大学院大学

瀧川裕貴・定松淳編, 2009, 『太田朋子オーラルヒストリー』総合研究大学院大学

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

付録1 インタビューガイド

1. 大テーマ群——ライフヒストリーと共同利用機関の歴史の交差——

家族・家庭背景

両親の職業や社会経済的地位について→科学者の社会移動に関する研究
兄弟や家庭での教育について→科学者の一次集団における社会化

小中高時代

進路決定のきっかけについて→学校における社会化
読書や趣味、交友関係について→同上
影響を受けた教師について→重要な他者

大学・大学院時代

進路決定について→科学者のキャリア形成
大学時代の過ごし方について(勉学や交友関係)→学校における社会化
大学院での教育、指導教官のパーソナリティ、研究テーマについて(現在と比べて)→大学における研究のあり方の変遷
当時の遺伝学(物理学 etc.)の状況について(現在と比べて)→学科の歴史

研究所への就職

研究所に就職するに至った経緯→科学者の社会的ネットワーク
研究所の上司および先輩研究者について→研究所の歴史
研究所における研究の進め方、テーマの設定について→組織としての研究所
研究テーマの変更について→ライフヒストリーにおける転機

研究所の運営

共同利用研になるに至った経緯について→共同利用機関の歴史
共同利用研としての独自の課題について(具体的な課題について)→組織としての共同利用機関

総研大について→組織としての共同利用機関

科学と社会

社会との関係を考えるきっかけとなった出来事について→科学と社会

歴史的出来事との関連

戦争体験

大学紛争

2. 具体的質問項目例

家族・家庭背景

生まれた場所はどのようなところか。

父親の職業は何だったか。

母親の職業は何だったか。

祖父や曾祖父家系の歴史はどうなっているか。

父親はどんな人だったか。

母親はどんな人だったか。

兄弟はいたか。どんな人だったか。

兄弟とは仲良かったか。

家庭での教育はどのようなものだったか。

家庭での話題や過ごし方はどうだったか。

小中高時代

学校はどんなところだったか。好きだったか嫌いだったか。

学校ではどの教科が好きだったか。逆に教えられ方等に不満をもったことはあるか。

影響を受けた教師はいるか。具体的にはどのような影響を受けたか。

学校時代の趣味や交友関係はどんなだったか。

学校時代はどういう本を読んでいたか。印象に残る本はあるか。

学校時代の出来事で現在のキャリアに結びつくような出来事はあったか。

第1章 基盤機関アーカイブズの構築

大学・大学院時代

大学はどんなところだったか。

学部時代はどのように過ごしたか。

学部時代の交友関係はどうだったか。

学部時代の専門外の講義や本で印象に残っていることなどはあるか。

学部時代はどのように勉強したか。

進路決定の際にはどのような選択を考えたか(東大のように進振りがある場合)。最終的な決め手は何だったか。

専門・大学院ではどのような研究室にいたか。その研究室を選択した理由は何か。

指導教官はどのような人だったか。

大学院時代はどのような研究生活を送っていたか(典型的な一日を聞く)。

研究の進め方はどうだったか。

当時の専門分野の状況はどうだったか(現在と比べて)。

研究所への就職

研究所に就職したのはどんなきっかけだったか。

研究所の上司はどんな方だったか。研究指導はどのようであったか。

研究所での研究の進め方はどのようであったか。

研究テーマはどのように選ばれたか。

研究員時代はどのような研究生活を送っていたか。

研究テーマを大きく変えたことはあるか。それはなぜか。

研究所の運営

研究室の運営はどのようなものであったか。

研究と運営とのかねあいはどのようであったか。

官僚や研究所の外の世界との関係はどのようであったか。

共同利用研になるに至った経緯はどのようだったか。

どのような議論がなされたか。

最終的に共同利用研になった決定因は何か。

共同利用研になったことで変わったことは何か。

共同利用研の独自の課題とは何か。

その他

科学と社会の関係についてどのように考えるか。

考える契機になった出来事は何か。